

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗

12

入社して八年目、いくつかの現場を経験し、現場責任者としてようやく慣れてきた頃に起こった失敗です。

ある運河で、耐震補強の護岸工事を行ったときのことです。鋼管打設のため、杭打機を台船に乗せて現場まで搬入することになりました。機械の高さは5mくらいだったでしょう。橋をくぐるために台船に水を張り、1mほど船を沈めて曳航し、無事に現場に到着。ポンプで台船の水を抜き、船が十分に浮いたところで、その日の作業を終りました。

ところが翌朝、現場に来てビックリ。浮かんでいるはずの台船の姿がないのです。すっかり沈没し、杭打機のリーダの部分だけが水面から見えているありさまに、ただ呆然としました。

原因は、ポンプを船から引き上げずに放置したことになりました。サイフォン効果

港シビル株式会社
代表取締役

倉本 眞澄

昭和58（1983）年に東邦港湾企業（現港シビル株式会社）に入社。工事部長、専務取締役を経て、平成17（2005）年より現職。座右の銘は「不撓不屈」



で、一晩のうちに水が逆流してしまったのです。現場まで無事に曳航できたという安心感で、基本中の基本である終業時の後片付け、整理整頓を怠った、そのちょっとした気の緩みが、大きな失敗を引き起こしてしまったのです。

目の前の光景が信じられないという気持ちでしたが、とにかく一刻も早く台船を引き上げなくてはなりません。そのためには、自らが情報を収集し、これがベストだという方法を決断し、確実な指示のもとで推し進めることが大切だと考えました。

そこで、潜水士、電気技師、機械メーカーの社員など、専門家による対策本部をつくり、二十四時間体制で復旧にあたりました。十日はかかるというわれていた事態を、わずか二日で収拾し、鋼管打設を開始しました。オイルフェンスの設置や水没した機械の保全など、応急処置を施したこともありま

すが、何といってもスタッフ一人ひとりに直接指示を出し、コミュニケーションをとりながら、現場のみんなで気持ちを一つにして対応したことが、効を奏したのだと思います。おかげさまで工期内に竣工することができました。

この出来事で、5S運動である「整理・整頓・清掃・清潔・躰」の重要性をあらためて実感し、作業が終わったら始業時と同じ形になるまで点検するよう徹底しました。現場のみんなで「あれやったか」とお互いに声をかけ、明日の準備をして帰る。その繰返しのおかげで、今日まで大きな事故もなく、やってこられたのだと思います。決して基本を疎かにせず、気配り、目配りを忘れない。その当たり前のことこそ、土木事業者にとって最も大切な姿勢なのですから……。